

## セントラル・セントマーチンズ美術大学における 学びの現場より

鈴木 由子

Report on the Education at Central Saint Martins College of Art and Design

Yuko SUZUKI

### はじめに

多くのファッションデザイナーやアーティストを輩出している大学における学びの現場を調査する目的で、2000年から2002年にかけての2年間、イギリス・ロンドンのセントラル・セント・マーチンズ美術大学（以下CSMと記す）に在籍した。

CSMとは、イギリス・ロンドンのチャリングクロスロードとサウザンプトンロウにある大学で、筆者の在籍当時は、正式名をThe London Institute's Central Saint Martins College of Art and Designといい、現在はUniversity of the Arts London Central Saint Martinsへと名称変更されている。CSMは、1989年に歴史ある二校が合併し設立された。その二校のうちの一枚は、1854年設立のSt Martin's School of Artで、もう一枚は1896年設立のCentral School of Arts and Craftsである。<sup>1)</sup>そして在籍当時CSMは次に示す5つのCollegeの連合校の1枚という形で、London Instituteという名のUniversityと同等の位置づけの中にあった。他の4枚とは、Camberwell College of Arts, Chelsea College of Art and Design, London College of Fashion そしてLondon College of Printing and Distributive Tradesである。

CSMが持つ分野は、ファッションを含め、ファインアートやシアターデザイン等、アートとデザインに関するものである（表1）。CSMのファッション分野を学んだ卒業生は、ステラ・マッカートニー、フセイン・チャラヤン、ジョン・ガリアーノ、アレキサンダー・マックイーン などのように、ファッションデザイナーとしてのレーベルを打ち出し、パリやロンドンのコレクションに作品を発表する、あるいは他の有名なファッションデザイナーのアシスタントやミュージシャンの専属ファッションデザイナーになることがある。このようにCSMは卒業後も学生各自の能力を生かし続けていけるような人材を育成している。

筆者は、CSMでBA（Bachelor of Arts）ファッションのメンズウェアコースの第2学年から学

んだ。本論では、帰国後に行った学内の口頭発表では伝え切れなかった詳細部分について筆者の体験も含めて報告する。日本の教育との違いから、今後の服飾系教育に提供できるものがあることを期すものである。

在籍していたコースはメンズウエアに特化したコースであるが、日本の多くのファッションの学びの場で扱われるのはウィメンズウエアであることから、必要と思われる内容についてはメンズウエア以外のコースに関しても触れて行く。

## 1. 教育課程について

### (1) コースの種類

2000年時点でのCSMに置かれていたコースの種類と各コースの在籍年数について一覧にまとめた(表1)。筆者はBA (Bachelor of Arts) Mens Wear Course 2nd yearに編入したので、その前のコースの詳細はわかりかねることが多いが、ファンデーションコースに在籍中に次のBAコースそれぞれに向けての一通りの基礎を学ぶと思われる。ファンデーションコースからBAへの進学をした友人の話によると、BAのそれぞれのコースへの進学は一方的な学生の希望が必ずしも通るものではなく、教員サイドでそれぞれの学生に向いているコースを勧め、合意の上決定するとのことである。

またBAにはメンズウエアとウィメンズウエアのコース以外に4年在籍のコースがあるが、その場合の3年目はワークプレイスメント(インターンシップ)を1年間経験する期間とされている。<sup>2)</sup>

表1 CSMコースの種類と在籍年数

Foundation Studies in Art & Design	BA (Honours)		MA
1year	BA Fashion	Fashion design womens wear / 3years	2years
		Fashion design mens wear / 3years	
		Fashion design with knitwear / 4years	
		Fashion print / 4years	
		Fashion design with marketing / 4years	
		Fashion Communication with promotion / 4years	
	BA Art and Design/3years		
	BA Ceramic /3years		
	BA Fine Art/3years		
	BA Graphic design/3years		
	BA Jewellery design/3years		
	BA Product design/3years		
	BA Textile design/3years		
	BA Theatre design/3years		

### (2) コースの教育内容の構成

コースの教育内容には、大分類すると、メインスタディとカルチュラルスタディがある。メインスタディは、リサーチ・デザイン、パターンづくり、実物制作、イラスト・プレゼンテーションな

どの学習を含み、カルチュラルスタディは、リサーチ、論文、プレゼンテーションを含む。そして3年在籍のコースの学生の成績はメインスタディ80%、カルチュラルスタディ20%に配分される。<sup>3)</sup>

### (3) カリキュラム

カリキュラム全体を表すものとして、コースハンドブックからシラバスを抜粋し一覧にまとめた(表2)。表には1年生から3年生のメンズウエアとウィメンズウエアの両コースについてのみ記載した。<sup>4)</sup> メンズウエアコースとウィメンズウエアコースの特徴的な違いは、制作する物が違う・メンズウエアにはテーラリングを学ぶ機会が多い・ウィメンズウエアにはドレーピングが含まれることである。また、表2の両コース共通の1年から3年までの○印で示したものが、メインスタディと呼ばれる教育内容の分類で、●印がカルチュラルスタディと呼ばれるものである。

表2のシラバスに記載されているもので、用意されたプロジェクト(表3)に含まれていないものがある。それは時間外の自由参加型の教室やツアーであった。筆者はこの自由参加型教室等の内容と日本の教育との違いや重要性を感じるため、後に示す主なプロジェクトの詳細とは別にここに取り上げることとする。

#### 1) イラストレーションとドローイングに関する詳細

表2の2年生両コース共通の欄にある「イラストレーションとドローイング」に関係するものでは、ドローイング(クロッキー)のクラスが設けられていた。クロッキーとは、数分ごとに次々ポーズを変えていくモデルを囲み、描写していくもので、対象物の印象を的確に理解し、描写・表現することに主眼をおいており、服をデザイン・制作するには人体の把握が必要なため、このようなクラスがある。図1・2は筆者がドローイングのクラスで描写したものである。スケッチブックのサイズはB2判である。

また、デザインをしていく過程やポートフォリオで使用するイラストレーションやスペック(日本では、フラットドローイングやカチン画などと呼ばれている)など、ファッションデザインに関するもので、日本語ではひとくくりに「絵」と称されるものは、目的によって表現の仕方を様々にする必要がある。ひとつスケッチブックと呼ぶデザインノートに表現するものでも、図3, 4, 5の様に、イメージや目的によって変えてあり、絵の表現の仕方は決められていない。しかし、図6の様に、パターンを制作していくために必要な情報を伝達する手段として使う目的のスペックは、細かい情報が言葉で書き込まれることもあるように、詳細に書く必要がある。

この様に、ファッションを作っていく過程では、様々なスタイルの「絵」を表現できることを要求される。

#### 2) CADに関する詳細

両コース2年生共通で、CADのクラスがあった。ここでは、パターンメイキングにはCADを一切利用せずにスペックやポートフォリオ用のイラストレーション、あるいはプリントデザインにの

表2 メンズウェアコースとウィメンズウェアコースのシラバス

	メンズウェアコースのみ	両コース共通	ウィメンズウェアのみ
1 年	<p>○ニッティングによるファッショントレーニングへの導入</p>	<p>○調査の方法とテクニック ○最も重要な基礎的パターンカンティング ○服の組み立て ○イラストレーション ○単純な範囲の構築 ○ファブリックと布の実験 ○ファブリックの認識 (タイプ、性能、特別な物の取り入れ) ○プレゼンテーション技術 ○現代のデジタルカルチャーとファッションの認識 ○ファッショントレーニングへの導入 ○CAD への導入 ○自主学習 ○選択又は必修の言語 (英語) ●カルチュラスタディ</p>	<p>○マーカーティング技術への導入</p>
2 年	<p>○メンズウェアデザインのためのパターンカンティングと専門技術の発展的教育の継続 ○テーラリング技術の導入 ○服の構成的教育の継続 ○色、シルエット、ファブリックの調査、テーラリング、マーマーのものを関係づけたものを、細かく具体的に伝えるデザイン (スベック) ○パリコレクシオンメンズウェア見学 (オプショナル)</p>	<p>○調査 ○イラストレーションとドローイング ○ポートフォリオプレゼンテーション ○プレゼンテーションとデザイン・イラストレーションの目的のための CAD ○ビジネスウェアコース ○自主学習 ○選択又は必修の言語 (英語) ●カルチュラスタディ</p>	<p>○ウィメンズウェアデザインのためのパターンカンティングと専門技術の発展的教育の継続 ○テーラリングの導入 ○ドレーピングを含む服の構成的教育の継続 ○色、シルエット、ファブリックの調査、テーラリング、マーマーのものを、細かく具体的に伝えるデザイン (スベック) ○パリコレクシオン見学 (オプショナル)</p>
3 年	<p>○テーラリング技術</p>	<p>○メンズ・ウィメンズウェアデザインどちらかの選んだコースの専門的パターンカンティングと専門技術の発展の継続 ○服の構成と仕上げ技術 ○卒業コレクシオンプロジェクトの各自のアイディアに焦点をあて、各自の能力を高めるためのデザイン ○ポートフォリオプレゼンテーション技術 ●卒業論文 ○前進のための個人指導 ○キャリアトークス ○デザイン計画 (調査を通じたデザイン、カット&amp;メイクからなる卒業コレクシオンやファッショントレーニング展示会への発展とプレゼンテーション ○ポートフォリオプレゼンテーション技術</p>	

○：メインスタディに含まれる分野 ●：カルチュラスタディの分野

表3 メインスタディ・プロジェクトの種類と時間割上の課題割り当て日数

学期	課題 順序	プロジェクト・カリキュラム タイトル	プロジェクト等の時期	時間割上の課題割り当て日数
Holiday Autumn Term 2000	1	URBAN ETHNIC summer holiday project	夏休み中	
	2	A MILITARY MOOD tailoring project	10月2日～10月30日	リサーチ&デザイン4日 カット&メイク 11日 ポートフォリオプレゼンテーション・採点1日
	3	The Impact of Colour and Print Project	11月1日～11月27日	リサーチ&デザイン7日 プリンティング8日 ポートフォリオプレゼンテーション・採点1日
	4	Workwear Project	11月29日～12月13日	リサーチ&デザイン8日 採点1日
Spring Term 2001	5	Workwear Project part II	1月8日～2月2日	カット&メイク15日 ポートフォリオプレゼンテーション・採点1日
	6	Dogs' project	2月5日～2月19日 (この間1週間ブライベーク教員不在中各自プロジェクト進める)	リサーチ&デザイン8日 ポートフォリオプレゼンテーション・採点1日
	7	Sponsored project OGO	2月21日～3月5日・3月12日	リサーチ&デザイン8日 ポートフォリオプレゼンテーション・採点1日
	8	Tee-Shirt project	3月7日～3月23日・5月2日	リサーチ&デザイン10日 ポートフォリオ&実物プレゼンテーション・採点1日
Summer Term 2001	9	Help Final Years	4月23日～4月30日	上級生のファイナルコレクション制作等準備の手伝い10日
	10	Knitwear project 'to die for'	5月8日～5月31日	リサーチ、マシニングテクニック&デザイン15日 ポートフォリオ&実物プレゼンテーション・採点1日
	11	Paul Smith 'Little Black Dress' project	6月1日～7月4日	リサーチ&デザイン5日 カット&メイク17日 ポートフォリオ&実物プレゼンテーション・採点1日
Autumn Term 2001	12	Corombie tailoring project	10月1日～11月16日 (この間1週間インディペンデントスタディウィーク6日間教員不在中各自進める)	リサーチ&デザイン10日 (デザインチュートリアル2日含む) カット&メイク15日 仕上げ6日 ポートフォリオ&実物プレゼンテーション・採点1日
	13	Colour Project	11月19日～12月7日・1月18日	リサーチ&デザイン15日 ポートフォリオプレゼンテーション・採点1日
Spring Term 2002	14	Final Collection	1月11日～3月18日	リサーチ&デザイン15日 (チュートリアル4日含む) パターンメーキング&トワール31日 (チュートリアル5日・トワールラインナップ1日含む) ファイナルガーメンツ5日
Summer Term 2002	15	Final Collection	4月15日～5月16日	ファイナルガーメンツ5日 ファイナルガーメンツアセスメント9日 仕上げ4日 完成・ハンドイン5月10日 アセスメントショー5月16日
	16	Degree Examination Exhibition	5月22日～6月12日	展示会制作・準備5日 パブリックショー5月27日 インターナショナルイグザミネーション4日 エクスターナルイグザミネーション3日 卒業の可否発表 6月14日





図 1



図 2



図 3



図 4

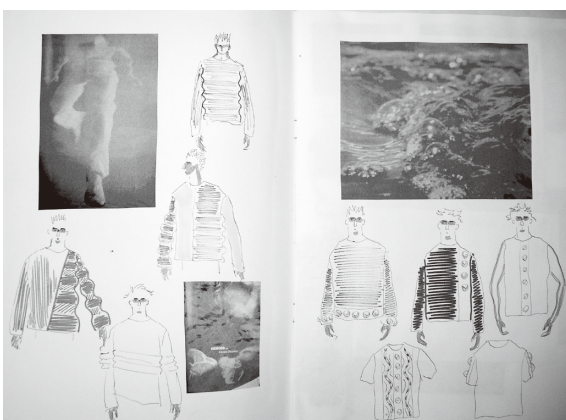


図 5

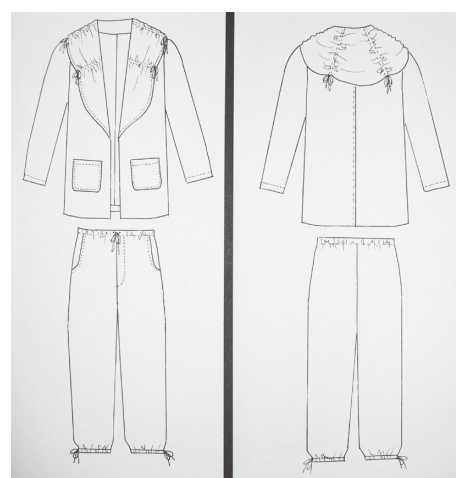


図 6

み利用していた。

### 3) ドレーピングに関する詳細

ウィメンズウエアコースの2年生に入ってくるのがドレーピングテクニックである。これはメンズウエアコースのカリキュラムにはなかった。

メンズウエアとウィメンズウエアのパターンメイキングの手段の違いは、昔からイギリスでも（日本でも）存在する。それはドレーピングによるものか、割り出し式でアイテムの製図をダイレクトに引いていくものか、あるいは、原型（マスターパターン）を操作し、引いていくかという違いである。メンズウエアコースでは、マスターパターンを操作する方法がとられ、ウィメンズウエアコースではドレーピングとマスターパターンの操作による方法がとられていた。これらの手段を選んでいる理由は、より迅速に、学生の思い描く様々なデザインへ展開しやすいことを目的としているからと思われる。またコース外にも、ショートコースで、ドレーピングなどのモデリングクラスが用意されていた。

### 4) 工場見学に関して

メンズウエアコースでは、シラバスにはなかったが、テーラード工場やニット工場などの見学ツアーがあった。

## 2. 在籍中に学んだプロジェクトについて

メンズウエアコースの2年生から3年生にかけて用意され、実際に筆者が学んだ全てのプロジェクトの書類やタイムテーブルから、時間割上に組まれた割り当て日数を確認し、表3にまとめた。<sup>5)</sup>

因みに、採点配分としては、全体の80%でつけられるメインスタディは、プロジェクトワークが60%、ポートフォリオプレゼンテーションとパーソナルリサーチが20%の内訳となっている。<sup>6)</sup> また各プロジェクトの採点は、全てか否かを記憶していないが、大抵掲示板に名前とともに点数を張り出された。進級できるかどうかの結果も掲示板に張り出された。

プロジェクトの更なる内容の詳細については、バリエーションの広がり伝わらなそうと筆者が判断する4つのプロジェクトを、学んだ全てのプロジェクト（表3）より選んだ。それは、表3・課題順序3 The Impact of Colour and Print Project、課題順序4.5 Workwear Project、課題順序10 Knitwear Project 'to die for'、そして課題順序14.15 Final Collection である。

### (1) プロジェクト内容の例（The Impact of Colour and Print Projectの場合）

#### 1) リサーチ

チューターからの書類によると、「20世紀のアーティスト、ポップアーティスト、キュビストなどから選び、彼らのワークを調査する。特に、色やプリントの使い方に注目する。あわせて、ファッションファブリックや服のデザインにどうやって適用するかも考えること。」<sup>7)</sup> とある。リ

サーチしたものは全て、スケッチブックに残していった。

## 2) デザイン

リサーチしたアーティストのワークを使い、3種類のプリントデザインを考えた。ただし、プロダクトとする場合には、シルクスクリーンの版を作るコストも考えなければならいことと共に、色の数に限りを設けた上で行うという条件付きである。

## 3) プリンティング

このプロジェクトの間だけ、プリンティングルームを使用できた。ファッションプリントコースの学生達がいる中でのプリンティングルームの使用方法和シルクスクリーンテクニックの説明が1回行われた。

1人1スクリーンを使用できるので、その中で3種類のデザインをプリントした。土台の布は色のついたもの、あるいは自分で染めたものとする条件があった。

インクを換えてプリントのカラーバリエーションを広げた。

## 4) ファイナルガーメントデザイン

小さなコレクションを考える課題が与えられていた。6アウトフィット（6体分の服上下のデザイン）をイラストレーションに表現し、スケッチブックにまとめた。

このプロジェクトのリサーチからポートフォリオまでのデザイン過程で積まれたそれぞれの断片を図7の写真として提示した。上は実際に行ったシルクスクリーンプリントのサンプル。左下はスケッチブック（デザインイメージを膨らませるノート）でリサーチしたアーティストの作品などが前の方にのせてある。中下はポートフォリオ用のスペック。右下はポートフォリオ用のイラストレーションで、スペックと見開きに並べて提示する。

## (2) プロジェクト内容の例（Workwear Projectの場合）

### 1) リサーチ

ワークウエアからデザインの発展を試みる課題プロジェクトであった。リサーチは、本からだけでなく、実物のワークウエアをも調査した。制作するガーメントのための布のサンプルなども含め、全てスケッチブックに残していった。

### 2) デザイン

リサーチをもとにした、モダンファッションを少なくとも20体以上イラストに表現できるように描いた。選んで20体のイラストにするということは、デザインだけで、100から150は考え、描く必要があるということである。





図 7



図 8



図 9



図 10



図 11



図 12

### 3) カット&メイク

与えられた15日間で、3つのトワルと仕上げた制作物（服）1体分を仕上げた。トワルとは、パターンメイキングをした後にキャリコ（日本ではシーチングと呼ぶ安価な木綿布を使用するが、それとも日本でキャリコと呼ぶ生地とも違う物であった）で服の形を作り上げ、モデルやマネキンに着せてデザイナーのイメージしたものが形に表現されているかどうかを確認するためのもので、トワルでの確認がとれた上で実物制作に移るため、仮縫いという工程は省かれる。従ってパターン（型紙）には、必要量の縫い代を書き込んだ。

カット&メイクの行程中は、チューターではなく、テクニシャンと呼ばれる、縫いについて専門的に詳しいスタッフや実際にメーカーで働くパターンメーカーがアドバイスのためにスタジオに出入りしていた。

最終的に筆者が縫い上げた作品（ジャケットとオーバーオール）をクラスメートに着てもらった写真（図8）である。写真はポートフォリオに使う目的で使用する。

### (3) プロジェクトの内容の例（Knitwear Project ‘to die for’ の場合）

#### 1) リサーチとデザイン

ファッションニットウェアコースの学生（同学年）とのコラボレーションによるプロジェクトであった。筆者のペアになった学生と ‘To Die For’ から共通のイメージ展開できるものとして選んだテーマは映画「タイタニック」から展開した「海」や「水」であった。海の中に沈んでいく俳優のイメージとニットとを掛け合わせる作業を二人で個別に行い、それぞれリサーチとデザインしたものから制作するイメージを絞り込んでいった。次のスワッチ制作と使用するスワッチの絞り込みはリサーチとデザインと同時進行で行った。

#### 2) スワッチ制作

ニットイングルームとニットイングマシンの使い方の説明が初めに行われ、各自でスワッチ（ニット地サンプル）を二人で分担の上合計20種類以上用意するというものであった。（図9上2段）写真には、相方のスワッチは手元にないため、筆者の制作したものだけだが、テーマの「海」や「水」から波しぶきや水の泡をイメージしたスワッチとなっている。

#### 3) ガーメントの制作

二人で制作したスワッチの中から選んだもので、ガーメント（服）をゲージ計算から行い、共同で制作した。このグループで制作したのは、濃紺のサマーセーターであった。

#### 4) イラストレーションとフォトグラフィー

制作した実物をもとに、各自のポートフォリオ用にイラスト表現した。（図9中央下）また、フォトグラフィーもポートフォリオに必要である。制作したガーメントをモデルに着用させて撮

影した（図9右下）。

#### （4）プロジェクトの内容の例（Final Collection Projectの場合）

##### 1) テーマの決定とリサーチ・デザイン

ファイナルコレクションは、学生各自で興味のある、あるいは考えたテーマで繰り広げる。筆者は「教育と将来」をテーマにした。9.11のテロがあった日、筆者はロンドンから日本へ一時帰国した当日であった。その衝撃的な映像から「戦争」「人が人を殺すという行為とは」「なぜ負の連鎖が起こるのか」「負の連鎖を止めるものは何か」「人は何の為に生れてくるのか」「東も西もなく人が進化するという事は」「戦争に使われた東西の鎧の発想は」「日本におけるこどもの日の由来は」「何のための武器か」などといった連想からリサーチし、コレクションのデザインを広げていった。

図10に筆者のスケッチブックの一部を提示する。上、中段はイメージを膨らませるためのリサーチした情報とニットやステッチによるテキスタイルデザインのスワッチを添付してある。左はデザインのみを描きためるためのデザインノートである。左下は布をどこで調達できるかを記すメモノート、右下はコレクションに決定したガーメントだけのノートである。

図10のスケッチブックは筆者のスタイルであり、他の学生はそれぞれのスタイルでスケッチブックを作っていた。デザインの行為は、各自考えた多くのデザインから絞り込むものであるため、リサーチの範囲は時間の許される限り多くの物を見る、聞く、体験し、それをまとめることが必要になる。チューターからは「スケッチブックの表現の仕方について」といった型にはめるようなコメントは一度もなかった。

最終的には、条件としてファッションショーで6体以上のものを発表しなければならない。数多くバリエーションを広げたデザインの中から、筆者は9体を選んだ。

##### 2) トワル制作

9人分のトワルを制作するのに、与えられた期間は約1ヶ月であった（表3）。最初にトワルを組み、マネキン（ボディ・スタンド）を使いながら修正し、パターンを作った。モデルが決定されると、それぞれのガーメントをどのモデルに着用させるかを決め、サイズ調整をし、トワルとパターンに反映させた。

##### 3) モデル決定

大学では、ファッションショーの為にプロのモデルを雇う。大学では「スクールモデル」と呼んでいた。数社のモデルエージェンシーから大勢のファッションモデル達がまとめて大学に呼ばれ、チューターと学生達がオーディションの審査をした。ファッションショーを回すのに必要な人数のスクールモデルが決まると、各学生はそのモデルを起用するかどうかを考える。筆者は、東西のミックスしたイメージの表現の為に、スクールモデルは4人お願いし、他にアジア系の人を探すことにした。アジア系のモデルとして、モデル経験のある同じコースの後輩一人、人に紹介してもらっ



たモデル経験者一人、そして掲示板に求人を出し、また街中でスカウトして決定した。

#### 4) トワルラインナップ

トワルだけを人に着せ、形のイメージがコレクションとして整っているかどうか、チューターの採点と、指導が行われた。

#### 5) 実物制作

各自用意した材料を使って、実物制作を行った。同コースの2年生（後輩）には、10日程縫製や買い出し等の手伝いをしてもらえるので、ここでは、縫製技術以外に、タイムマネジメント能力が必要になる。

#### 6) アウトフィットラインナップ

制作途中あるいは完成した実物作品を人に着せ、並べた上での採点であった。ここでは、カラーイメージやデテールなどの統一がチェックされる。ここで、筆者の9体の作品のうち1体はイメージが少し違うということで、コレクションから外した方が良く、チューターからの指導があり、発表するものを8体に減らした。

#### 7) アクセサリー等小物の用意

ファッションショーの為にアクセサリーや靴等の小物を用意する。イメージに合うものを制作、購入あるいは借用により用意し、ファッションショーの視覚的効果・演出を高めるための準備をする。

#### 8) 音楽の準備

ファッションショーに流すための音楽をMDに用意して提出した。リサーチから一貫したデザインをイメージアップさせるためのものなので、モデルのウォーキングの時間を考えて、短い時間の中での展開を決定した。筆者はリサーチのなかで、取り上げた作曲家・坂本龍一氏と作家・宮内勝典氏の教育についての対談の記事を扱っていたので、彼の音楽を使った。

#### 9) モデルの出し方

本番のファッションショーには、専門でファッションショーを取りまとめるスタッフが一人来ていた。前もってそのスタッフにモデルの出る順番や服の見せ方などを伝えた。

#### 10) 卒業コレクション

本番のファッションショーは、一般公開するものの、審査の為のもので、このプロジェクトの最終成績はこのショーで全てが決まる。図11, 12は筆者の作品を着て舞台裏で出番を待つモデル達である。

### 3. ルチュラルスタディについて

#### (1) カルチュラルスタディの意味と目的

主に論文を書くことで評価されるこの学習は、その意味や目的について次のように表現されていた。2000年のコースハンドブックによると「カルチュラルスタディプログラムは、幅広い枠組みと外部の世界の中の背景とを結び付け、学生の専門分野を発展させるものとして、アートとデザインの学習方法を理解する手助けになるように組まれています。そしてまた、学生の専門分野のためのもととなる材料や、鍛錬している芸術家やデザイナーの仕事と学生自身の学習とを客観的に解釈するなどの語彙を供給するものです。一般的なカルチュラルスタディの目的は、一つに、主な時代の歴史、アートとデザインのプロセス、現代的な表現の学説と文化的な生産について学生に導入させるためにあります。他にも、口頭や筆記による歴史的で基本的な技能を、プロジェクトワーク上、セミナー討論、リサーチと論文、多くの人と明瞭にアイデアを伝達しあう為の必要な技術へと批判的な分析を踏まえた上で発展させるものです。』<sup>8)</sup>

#### (2) カルチュラルスタディの内容

カルチュラルスタディの内容は、1・2年生共通としてセミナー・エッセーを2ターム分、2年生はその上にプレゼンテーションと卒業論文のリサーチが加えられる。さらに卒業学年（メンズウェアコースでは3年生）で卒業論文を提出する。

#### (3) カルチュラルスタディの進み方

筆者が体験したものとしては、全コースの2年生を対象に約20のテーマとその担当教員が張り出され、学生はそこから興味のあるものを一つに絞り、選んだ先生のセミナーを1ターム（毎週1日）受講し、最後に論文を書いた。また、セミナーの途中に各グループのプレゼンテーションを行った。

卒業論文のリサーチについては、テーマに合う、デザインチューターとは別の、決まったチューターに方向性を話し、チューターから読むと良いとされるそのテーマに合った本を紹介してもらうことができた。

論文の為の調査や下書きなどは2年生のうちから開始し、3年生最初のタームの開始から2日目に論文下書きの提出があった。その間2回ほどチュートリアルが行われ、チューターより軌道修正や追加などが指示された。3年生になると、論文の締め切りはスプリングターム（表3参照、2ターム目）の開始から3日目であり、メインスタディのファイナルコレクションリサーチが開始される前に終了した。

#### (4) 論文に求められる条件

求められた論文の長さについては、1年生のエッセーは1500ワード以上、2年生は2000ワード以上、卒業論文では5000ワードから7500ワードに仕上げるものとされていた。

卒業論文の内容では、テーマはそれぞれだが、共通して求められるものは、「独創的な考え、分析・統合力としての批判的な技術、調査、表現の流暢さ、紙面上のプレゼンテーション総合力」の5点とされている。<sup>9)</sup>

#### 4. アンケート

CSMのアンケート質問項目は以下の通りである。<sup>10)</sup>

「メンズウエア 2年生

学生自身の批評によるフィードバック

この目的は、あなたの評価において、適切で望ましいアドバイスを得ることができたかどうか、あなたのチューター達を査定するものです。

- ① 自己批評      プロジェクトの中で上手くいったものは：  
プロジェクトの中で上手くいかなかったものは：
- ② あなたが受けて自身の役に立った批評は？      あなたのチューターからの批評：  
あなたの同輩からの意見：
- ③ もし、もう一度このプロジェクトをスタートさせたら、あなたは二度目の方が良くなることができると思いますか？      どのように？
- ④ 私達が将来のプロジェクトによって、あなたの学習を改善させるのにどのような変化を提案できますか？
- ⑤ あなたの得た点数を理解していますか？あなたの視点から、それは公平でしたか？」

#### 5. 設備

筆者が在籍したコースで2年間に使用した設備（教室等）には、メンズウエア・ウィメンズウエア両コース共通の広いスタジオ（実習室）、プリンティングルーム、ニッティングルーム、ドローイングルーム、パソコンルーム、ミーティングルーム、図書館、チャリングクロスロードの校舎には小ぶりのラウンジ、サウザンプトンロウの校舎には広い食堂があり、利用することができた。

その中で特にプロジェクトや論文に必要な情報がある、図書館について報告する。チャリングクロスロードの校舎にある図書館には、現在も刊行されているファッション雑誌は、創刊号から全て揃えてあり、学生はいつでも簡単に過去の情報を調査することが可能である。

雑誌は一般的に販売される時期にタイムリーでホットな内容が盛り込まれているため、時代がずれてしまうと、本来の雑誌の役目は終えてしまうものだが、服の研究にはファッション雑誌こそが、過去の物を一度に数多く調査できる重要なものである。学生が自由に大変古い書物から新しい情報までふれられる設備としては、とても有難いものであった。

#### 6. 現在のCSM

在籍当時と変わらず、著名なアーティスト達が卒業しているようであるが、当時と現在では、連



合大学やコースに多少の変化がみられるため、変更点を表4にまとめた。

ファッションに関する変更では、ファッションコミュニケーションとマーケティングの分野コースが同じコース内にまとまり、以前にはなかったコースとしてファッションの歴史と学説を学ぶコースができたことである。<sup>11)</sup>

表4 在籍当時から現在のCSMの変化

	London Institute 時代に存在し、 現在ないもの	University of the Arts London 以降に 新しく加わったもの
他の連合大学についての変化	London College of Printing and Distributive Trades	London college of Communication Wimbledon College of Art
CSM のコース 全体の変化	BA Art and Design BA Theatre Design	BA Performance Design and Practice BA Directing-Drama Centre London BA Criticism, Communication and Curation:Art and Design BA Architecture:Spaces and Objects BA Acting-Drama Centre London
CSM・BA ファッション コースの変化	Fashion design with marketing Fashion Communication with promotion	Fashion Communication with Marketing Fashion History and Theory

## おわりに

これまで述べてきたCSMの学びの現場に身を置く経験によって得られたことで、特に有意義で筆者の成長につながったこととは、服飾系の学びにおいては、全く違う学習のスタイルがとられていることを知り、以下にまとめるように、今後の日本の服飾系教育に必要なことを気づかされた事と、日本人としてのアイデンティティーを意識することができるようになり、筆者の属するコミュニティの発展の為に何をすべきかを考えられるようになったことである。

今後の服飾系教育に必要と感じたこととは、次のふたつにまとめられる。

まずは、昔と現在の比較でいうと、そもそも日本の洋服文化は真似ごとから始まっており、昔は真似させることを教育の中に取り入れてきた時代であった。学生は新しいことを学ぶ時に、教員の細かい指示のもとと言われたことを学んでいくため、常に学生の姿勢は、教員などからの指示や情報・流れを待つこととなり、受け身となる。しかし時代は流れており、文化の多様性と共に教育方法を発展させるには、教員からの情報発信に加えて学ぶ側が各自に思考力を働かせるような提案を取り入れていくことと、場合によっては一人一人の学生の独自性を育むことが重要であり、それが学生の自発性を活発化させることを可能とし、さらに時代が進んだ時にも対応していけるような人材に育てられることである。

次に、服が作られるまでには、リサーチ、デザインをし、絵の表現をする他に、主に、繊維の特徴、テキスタイルデザイン、コスト計算、型紙づくりから縫製に至るまで、様々な知識を要する仕事が行われている。CSMでは、デザイナーやアーティストを育てる大学ではあるものの、絵だけ表現できるようになれば良い、あるいは縫えるようになれば良いというような人材育成はしていな

い。それぞれの分野を超えた範囲まで広げたものを、一つ一つのプロジェクトの中に組み込ませている。それぞれの分野のつながりを持たせることが、学生の能力をバランスよく伸ばし、服飾文化の発展につながるということである。

日本での服に関する業界は現在、決して明るいとは言えない。しかし自己満足ではない、世界に通用する日本人としての独自性を育むことの重要性も痛感している。

## 謝辞

東京家政大学に勤めてから、日々「外に出なさい（勉強しなさい）」と言い続けて下さった元教授の故成田幸裕先生、留学を勧めてくださった当時在職の学科内の卒業生の諸先生方、2年間部屋を開けて留学することを最初に許可して下さった桃木美恵教授、推薦状を書いて下さった当時学科長で元教授の故藤重昇永先生、そして不在の間、仕事上何かとご迷惑をおかけすることになりました学科内外の諸先生方には、この様な機会を恵んで頂きました。

そしてCSMのコースディレクター＝Ms Willie Walters とメンズウエアコースチューター＝Mr. Christopher New には、デザインをご指導いただきました。

改めて皆様には心より感謝申し上げる次第です。

## 註

- 1) University of the Arts London Central Saint Martins, <http://www.csm.arts.ac.uk>.
- 2) The London Institute, Central Saint Martins College of Art and Design directory 99/00.
- 3) The London Institute, Central Saint Martins College of Art and Design school of Fashion and Textile Design BA(Honours) Fashion Course Handbook 2000, p.15, p.21.
- 4) 同上, p.28, p.38, p.49.
- 5) Chris New, Timetable Autumn term 2000 - Summer Term Plan.
- 6) The London Institute, Central Saint Martins College of Art and Design school of Fashion and Textile Design BA(Honours) Fashion Course Handbook 2000, p.15.
- 7) Chris New, Second year menswear project November 2000 The Impact Of Colour And Print.
- 8) The London Institute, Central Saint Martins College of Art and Design School of Fashion and Textile Design BA(Honours) Fashion Course Handbook 2000, p.18.
- 9) 同上, p.52.
- 10) 作成者不明, 2<sup>nd</sup> year menswear Student Feedback On Their Critique,
- 11) University of the Arts London Central Saint Martins, <http://www.csm.arts.ac.uk>.